三菱商事復興支援財団・助成事業

3.11後の
コミュニティづくりに向けてつながる

NPO法人 CoCoT 円居の場を通したコーディネーションの記録

平成25年4月

特定非営利活動法人 コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoT

三菱商事復興支援財団・助成事業

3.11 後のコミュニティづくりに向けてつながる

ＮＰＯ法人ＣｏＣｏＴ　円居の場を通したコーディネーションの記録

目　次

はじめに　まさに今求められる中間支援組織の復興支援

NPO 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoT 副代表理事　小山淳子……2~3

円居の場 in いわき

NPO 法人 CoCoT 2012 年度 復興支援事業～基本方針と対象～

被災地で活動する人たちの伴走者として……4~5

地域社会の再生、日本社会の立て直しに向かって、「円居の場 in いわき」の開催 …6~7

座談会 in いわき　企画に関わった人たちが振り返る第１回目のディスカッション　……8

参考資料

円居の場 in まつど紹介 ……9

NPO 法人 CoCoT 復興支援活動　成果と展望

新たなコミュニティづくりに向かう仲間たちをつなげて

復興支援担当コーディネーター 円居の場プロジェクト担当　谷口起代……10~11

円居の場　参加者の感想 ……12

まさに今求められる中間支援組織の復興支援

NPO法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoT
副代表理事　小山淳子

NPO法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoTは、中間支援組織として、福島県いわき市を中心に復興支援活動を行っています。被災地支援では、緊急時には、避難者に支援物資を届けることや支援先とのボランティアマッチングなどが最も重要で優先されます。時間の経過とともに、直接的な支援から新たな段階に入ると、どのような復興支援活動に取り組んでいくか考えていく必要があります。復興事業の担い手が外部支援者から当事者の地域住民の方に移ることにより、支援の質が変化します。

そこで、中間支援組織の役割が重要なものになります。

中間支援組織が担う役割はあくまで「支援」です。地域住民の方が、自分たちのまちを魅力ある住み続けたい地域にするために主体的に関わっていくためのサポートの役割をします。意欲のある人たちがいるまちを復興支援していくことは、さほど困難なことではありませんが、プレーヤーである地元の人たちが戸惑いすっかり意欲を失っている状況で、どんな働きかけをして仕組みをつくりそれが回り被災地の役にたつのか、見極めることは非常に困難なことです。

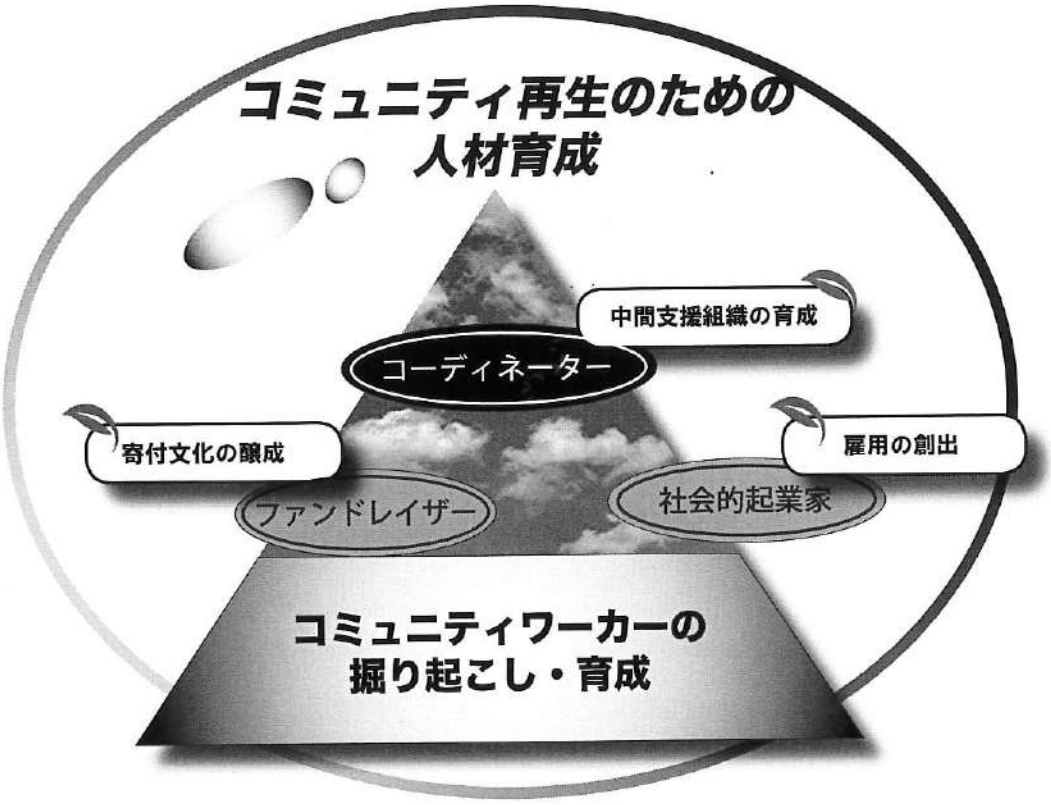
中間支援組織はどんな仕事をするのでしょうか？「自治体などの行政と民間組織の間に立って、双方の立場や意見の違いを調整して繋いだり、資金や資源、人材などのマッチングを行う組織」という解釈が一般的です。

もう少し、具体的に考えてみましょう。

地域社会には、近年の社会的課題の多様化・深刻化にともない、行政サービスだけでは対応しきれない社会的弱者の存在が顕著となっています。少子高齢化社会の課題は想定以上に加速度的に深刻な状況となっています。3.11の震災以降は、被害状況もそれぞれに違い、さらに被災した農漁村は地域性も幅広く、抱えている地域課題もますます複雑多岐にわたっています。

こういった課題と当事者の人々に対しては、地域のきめ細かな課題に対応できるNPOの活動が期待されていますが、現実には支援する現地の団体側の疲労感も色濃くなっています。その理由の一つに様々な方向から支援が被災地に投入された結果、その情報量の多さが、逆に適切な判断を下しにくい状況を作っています。地域のなかで散逸した大量の情報から、自分たちに必要なデータを出さなくてはならないのです。支援者としての専門的な訓練を受けていないボランタリーな人々がこの大震災で一足飛びに非常に高度な判断をする立場になったのです。情報を分析し、文脈化し、情報を有効活用できる“かたち”に咀嚼して、必要とする人や組織に的確に渡すことのできる技術を持つ人の存在が求められています。更に、そう

いわきの休耕田に咲くオーガニック・コットンの花（2012年9月撮影）



した情報を、活用することのできる体制を整備しなくてはなりません。復興支援におけるCoCoTの中間支援としての役割はそこにあると私たちは考え活動しています。CoCoTのコーディネーターは、「情報の目利き」となり、支援者を育てるための取り組みをしていきます。

次に、大きな課題は、バーチャルの情報を活用しながら、どれだけリアルな関係づくりができるかということです。人と人との関係性の中でしか、物事は動いていかないものです。「ネットワークし情報共有できる組織づくりをしたのに、その先が見えない。」「動かない。」と感じるのは、互いの特性を持ち寄る関係づくりができていないからです。人と人が対面し物事を動かそうとすると、見えなかった立場の違いや利害関係、感情のもつれが表面化します。復興支援は、小さなパーツを一つ一つ積み上げて形作っていくように、関係を積み上げて生活圏の中での経済の循環システムを創っていくことから始まると、私たちは考えています。

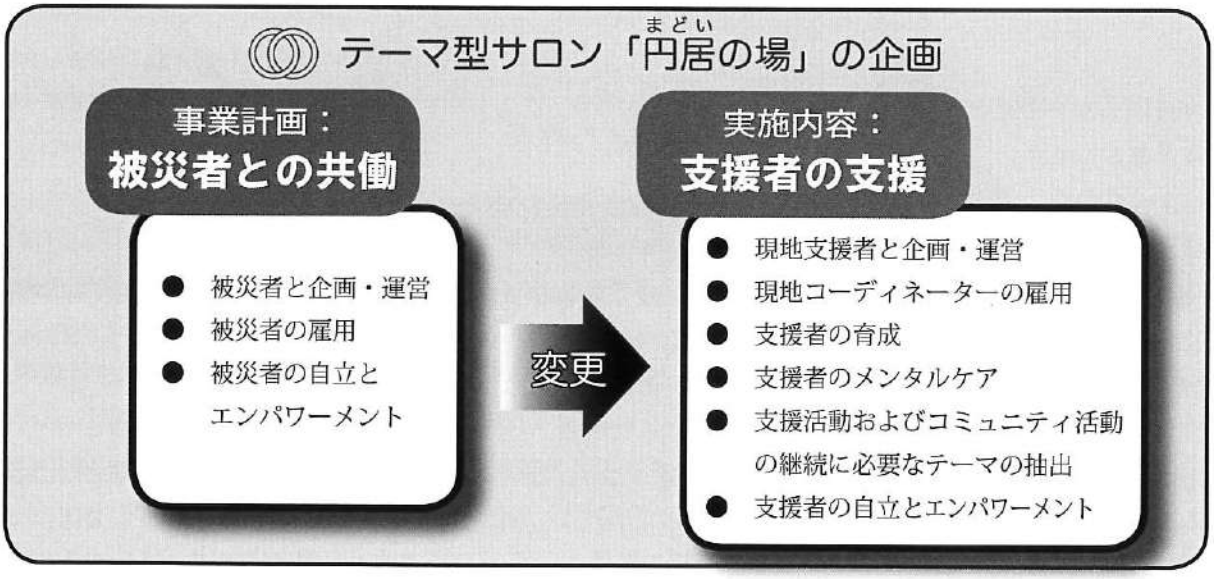
24年度は、人と人が、様々な形で出会う場を用意し関係づくりの可能性を引き出すことに取り組みました。やっと、始まりのスタートラインについたということです。

津波被害を受けたいわき市海岸周辺（2012年9月撮影）

NPO 法人 CoCoT　2012 年度 復興支援事業　～基本方針と対象～

被災地で活動する人たちの伴走者として

NPO 法人 CoCoT 復興支援事業の基本方針は「震災によって壊滅した地域が、新たな価値を創造できる活力と人材を創出できる力を持ち、経済活動に繋がるコミュニティの再生を自分たちの手で担える復興支援活動を目指す」ことである。福島県いわき市の「3.11 被災者を支援するいわき連絡協議会（通称みんぷく）」の定例会参加をベースに聞き取りを行った結果、震災から 1 年経ち地域課題が複雑化する中、支援者の困惑や疲労に対する支援を行い、活動を継続するのに必要な人材育成や情報提供を行うことが急務であることが判明した。そこで、当初、「いわき市内の被災当事者」としてきた支援対象を、「いわき市内で被災者支援を継続的に行ってきた個人やＮＰＯ等の団体」へと切り替え、支援者が日々活動で直面している課題を整理し、活動において生じている疑問や不安を受け止め、方向性を見出すために議論をする場を提供していくことに取り組んだ。



円居の場 in いわき　開催までのスケジュール

日	場　所	内　容	
2012/8/20	小名浜事務所	初顔合わせ:メヒカリチーム（円居の場企画チーム）誕生	課題出し
2012/9/14	小名浜事務所	メヒカリ会合	課題整理
2012/10/10	小名浜事務所	メヒカリ会合	課題整理
2012/11/15	小名浜事務所	メヒカリ会合	第 1 回座談会企画
2012/12/13	いわき市文化センター	円居の場 in いわき 第 1 回座談会	コミュニティ活動と経済活動をつなぎ合わせる ～哲学者　内山節氏とともに考える、ふくしまから創造するこれからの社会～
2013/1/24	小名浜事務所	メヒカリ会合	第 1 回座談会の振り返り 第 2 回ワークショップの企画
2013/2/23 ～ 24	いわき市生涯学習プラザ	円居の場 in いわき第 2 回ワークショップ	コミュニティに「聴く」力を取り戻す 井戸端ワークショップ＆身体で聴くワークショップ
2013/3/18	小名浜事務所	メヒカリ会合	2012 年度の活動の振り返り

円居の場 in いわき 一年の道のり

支援者が直面している問題から課題を抽出、「円居の場」の開催へ

復興支援活動の主軸を「支援者の支援」と位置づけ、支援者が直面している課題を受け止め、活動の方向性を見出すために議論をする場を提供していく、その手法として CoCoT が用いたのは、テーマ型サロン――その時その地域にふさわしいテーマを選び、選んだテーマに合ったゲストを招いて集う――の開催だった。それを、人が輪になって集う、暖かく安心で安全な場を連想させる「円居（まどい）の場」と名付け、その開催にむけて、いわき市で支援活動を行っている者と共に創るプロセスを歩んだ。

メヒカリチーム（円居の場企画チーム）の誕生

「それぞれの立場（所属団体や企業）を脇に置いて、日々の活動で感じている思いや疑問をじっくり話してみよう」という声かけに、8月20日、5人の若者が集まった。「震災がなければ、おそらく今、いわきにはいなかった」とそれぞれが口々に語りながらの自己紹介から始まったこの会合は、休憩を忘れて5時間も話し続けるほどに会話が深まる場となった。「考えてみるとこれだけじっくり話す機会はなかった。またやりませんか」の言葉を受けて、その日に出し合った課題を元に「円居の場」のテーマ選びをすることへの協力を提案、今後も日々置き去りにしていることを語れる場をやっていくことに話がまとまった。置き去りにしている物事の中に、実は、宝――解決への糸口が隠れている――かつて漁師が売り物にならないと捨てていたメヒカリが今ではいわき市の魚となっているという逸話との親和性から、チーム名をメヒカリに決めた。こうして、通称「メヒカリ」会合が月1回のペースで始まった。

メヒカリチームとの共働作業でテーマ選び

その後3回に渡る課題整理の末、いわきで開催する「円居の場」に招聘するゲストは、哲学者と「聴く」の達人に絞り込まれた。12月は、地域の再生に向けて活動する者にとって社会の構造的な問題を理解する場を、2月は、喪失、対立、分断を経験した人々の不安や怒りや絶望を、日々「聴く」ことが多い支援者がそれを消化し楽に聴くことを体感する場を創ることになった。メヒカリメンバーは、被災者や地元住民と日々接点があり、若くて鋭い感受性でいわき市の課題を肌で感じている。「そういう話なら聞いてみたい」「その切り口ならこの辺の層の人たちに響く」といったフィードバックでテーマ選びの羅針盤的な役割を果たした。こうして「円居の場」は、月1回、参加が義務づけられてはいない小さな会合に集うメヒカリメンバーとの共働作業で創られていった。

8月20日会合の様子。自己紹介（左）、ポストイットで課題出し（右）

抽出した課題

《現状・問題意識》
- 支援者ＶＳ被災者の構造の障壁
- 被害者意識＝人間の尊厳を脅かす
- 「支援」が人々の自助力・尊厳を奪っている

《大切にしたい姿勢》
- それぞれの心のペース
- 対等な「人」として出会う
- 自己満足な企画にならないように
- 外側からではなく内側から膨らんでいく仕掛け

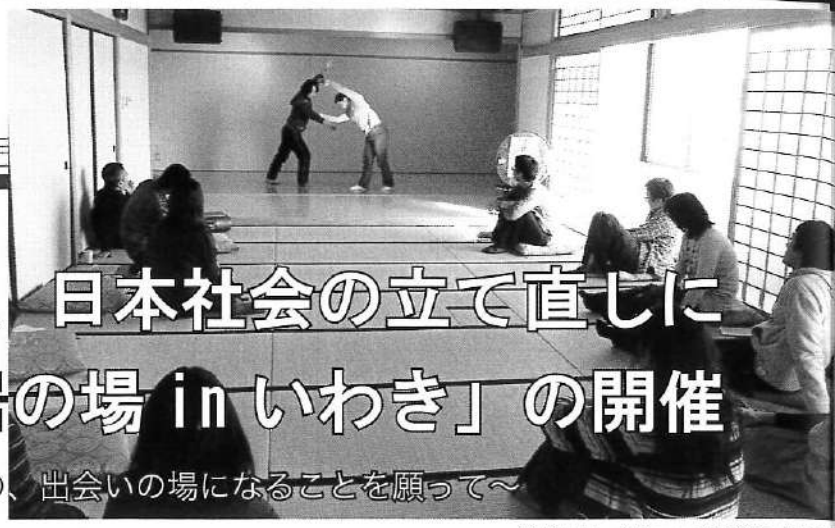
《必要なもの》
- 発想力、柔軟性、具体化する力
- 共感できる人・仲間が集まる場
- 「生き方」を見直すヒント
- 参加者の活動に生かせるヒント

～8月20日の課題出しより～

抽出したテーマ

《円居の場のテーマ案》
- コミュニティとは何かを掘り下げる
- 日本のコミュニティには何が存在していたのか
- 江戸時代の暮らしから学ぶ
- 貨幣や公的サービスに頼らないセーフティーネット
- 「支援とは」を掘り下げる
- 専門家にたよらない「こころのケア」
- 郷土芸能が持つ力を学ぶ、舞台装置のからくり
- 「場」が持つ力を学ぶ
- 和解のプロセスを学ぶ（プロセスワーク等）

～3回のメヒカリ会合を経てまとまったテーマ案～



地域社会の再生、日本社会の立て直しに向かって、「円居の場 in いわき」の開催

～これからの社会を共に創る仲間の、出会いの場になることを願って～

第２回ワークショップの様子（写真）

ＮＰＯ法人ＣｏＣｏＴはいわき市で活動する若手支援者の協力のもと、12月と２月にテーマ型サロン「円居の場」を開催した。若手支援者が日々直面している課題から抽出したテーマは、おのずと、これからの地域再生にむけて、これまでの「あたりまえ」――第１回目は「経済活動」の概念を、第２回目は「聴くこと」――を見直すものとなった。

円居の場 in いわき　第１回 2012年12月13日
いわき市文化センター 3F 和室

コミュニティ活動と経済活動をつなぎあわせる
ー哲学者　内山節氏とともに考える、ふくしまから創造するこれからの社会ー

＜呼びかけ文＞

大震災と原発事故、現在そして今後も続く放射能問題。この問題に直面した福島では、コミュニティ再生のために、がむしゃらに活動をしてきました。しかし、これからの社会を創り直していくためには、復興に必要な「コミュニティ活動」と「経済活動」を、一体的に捉え、「生きる場における経済」を取り戻していく必要があります。

「コミュニティ活動」と「経済活動」は、しばしば、矛盾し合います。しかし、私たちの祖先は、それほど遠くないかつて、生きることと働くことが矛盾しない暮らしを営んでいました。そのような働き方が残る村暮らしをしながら、労働の意味を問い続けてきた哲学者内山節氏を囲んで、「命を大切にすること」と矛盾しない経済活動をいかに創っていけるのか、考えませんか。

第１回座談会の風景

第１回チラシ

＜当日の様子＞

参加者、ゲストの内山節氏、スタッフ３名の総勢19名が輪になって座り、主催者の主旨説明、参加者の自己紹介、内山節氏の「コミュニティと経済」に関するお話の後、参加者皆での座談会となりました。地域復興のために採算を度外視して活動してきたが、今後、生活の糧を得ることとどう折り合いをつけたらいいのか――会場は、真剣さと切実さ、それでも続けていくという強い意志と良い方法を模索する前向きな問いに溢れていました。「是非継続してほしい」の声が多数届き、「円居の場」が、個人で孤独に活動している者たちが横断的につながり励まし合える場として貴重だということが確認できました。

円居の場 in いわき　第２回 2013年２月23・24日
いわき市生涯学習プラザ５階 和室

コミュニティに「聴く」力を取り戻す
――地域の中で互いに聴き合う――

＜呼びかけ文＞

「聴く」ということは、話し手と聞き手が相互に作

井戸の場 in いわき 第2回　コミュニティに「聴く」力を取り戻す

地域の中で 互いに聴き合う

1日目：井戸端ワークショップ
～「聴く」を味わう～
2013年2月23日（土）18:00～21:00
参加費無料　定員20名

2日目：身体で聴くワークショップ
～人の気持ちによりそい表現する～
2013年2月24日（日）10:00～16:00
参加費無料　定員30名

会場：いわき市生涯学習プラザ 5F和室（いわき市平字一丁目1番地）

道先案内人：橋本（はしもと） 久仁彦（くにひこ）氏
シアター・坐・フェンス代表・きくみるはなす縁座舞台代表主宰

★申込・問合せ先★
NPO法人CoCoT
井戸の場プロジェクト担当
mail:info@npo-cocot.com
携帯:080-5875-9910

対象
「聴く」ということを深めたい人
力を活かして「聴く」ことをしたい人
生活支援相談員や傾聴ボランティアなどの活動をされている方
このチラシにピン！っときたすべての方

一日のみ参加も歓迎です。

三菱商事復興支援財団

第２回チラシ

用しあうこと。ただ、ありのままに聴く人がいて、「ありのまま」が語られだす。長年にわたり「聴く」ということを探求してきた橋本久仁彦氏を案内人に、新たな角度から「聴く」ことを体感してみませんか？

第２回・身体で聴くワークショップ

○１日目：井戸端ワークショップ
～「聴く」を味わう～

輪になって座り、「聴く」の達人である橋本さんの軽快で温かな案内に導かれながら参加者一人一人の想いや居どころに耳を傾け合います。案内人が創りだす安全で安心な空間の中で、ただ、今、ここにくつろいで、「聴く」を深め、「聴き合う」を味わいましょう。

○２日目：身体で聴くワークショップ
～人の気持ちによりそい表現する～

コンタクトインプロ（注）の技法を取り入れた即興表現を通して、日頃何気なく行っている聴くということや、人の気持ちによりそうということを、身体で体感してみましょう。

＜当日の様子＞

交流サロンで働く人、インタビューで聴くを生業としている人、保健師、看護師など、１日目は９名、２日目は13名の参加者が、「聴く」の世界を探求しました。相手の身体の微妙な動きによりそう２人１組のエクササイズでは始終笑い声が響き、新たな気づきの連続のうちにあっという間に時が流れ、２日目が終わる頃には、参加者は一様に身体も心も緩んだ様子。「橋本先生は今の福島に必要な人、年に２回は招聘しよう」といった声が上がるほどの盛り上りを見せて解散となりました。

（注）コンタクトインプロとは、「触れる＝コンタクト」こと、相手や空間を感じることからはじまるダンス／身体技法。近年ではコミュニケーションスキルとして、アーティスト、教師、整体師、カウンセラーや介助に関わる人など、幅広い対象からの関心を集めている。

【ゲスト　プロフィール】

内山　節（うちやま　たかし）

哲学者。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授。NPO法人「森づくりフォーラム」代表理事。1970年頃から東京と群馬県の上野村との二重生活をおくる。「群馬県総合計画21世紀のプラン」執筆を手掛け、身近な未来として100年後を見据え、３世代の共同作業という視点から、地域社会の創造を提唱した。震災後の著書には『文明の災禍』『内山節のローカリズム原論　新しい共同体をデザインする』がある。

橋本　久仁彦（はしもと　くにひこ）

1958年生まれ。高校教師、野球部監督、カウンセラーとして、長年にわたり「聴く」ということに向き合い続けてきた。10年間続けた龍谷大学学生相談室カウンセラー退職後、アマチュア劇団シアター・坐・フェンスを旗揚げし、現在、「聴く」ということによってのみ成り立つ「きくみるはなす縁座舞台」の公演を全国的に行っている。

「きくみるはなす縁座舞台」とは、その時、その場所に集まった人たちで行う即興舞台。何かの縁で集まった人たちが円になって坐り、話し手の言葉に全員が耳を傾け、放たれた言葉を役者が演じる。「きくみるはなす縁座舞台」で、話し手が語った言葉のみでなく、その言葉に込められた情念や心境までもが、ただありのまま受け止められる様は、不思議で温かく、聴くの真髄を体験できるとして、カウンセラーや教師など「聴く」ことを生業とする者のファンも多い。

写真上・小名浜事務所にて座談会（3月18日）　司会・谷口起代（円居の場プロジェクト担当コーディネーター）

座談会 in いわき

企画に関わった人たちが振り返る 第1回目のディスカッション

谷口　昨年8月20日に初会合を開いて、それ以降月1回の、通称「メヒカリ会合」を続けてきましたが、自己紹介と課題出しで5時間も語り続けた初回の会合の記憶は、私にとって、今でもとても鮮明で、「ここにテーマあり！」って思ったことを覚えています。「ここにある若者たちの動き、感性を殺しちゃいけない」、大げさだけど「復興ってここから始まる！」と。皆さんにとっては、あの日はどんな日でしたか。

鵜沼　いわきに戻って来てからの動きを自己紹介したとき、短い期間にいろいろなことがあったんだなと気付きました。震災直後から動いてきた人たちはそれ以上に大変だったんだと頭が下がる思いをしました。

会田　夏、鵜沼君から「東京から震災を契機に帰ってきた若い人たちで集まって、いろいろ話をするんだけどどう？」と誘われて、面白そうだなと参加しました。いわきの今抱えている問題や課題を皆でポストイットに書いて色分けし、課題を整理したことで、8月以降、自分で動く上でいろいろと参考になりました。

谷口　いわきで活動している自分自身の課題がピンク、いわきの課題が水色、という感じでね。「でも混ざっちゃうよね」とか言いながら。

東川　震災に対するもやもやとした思いを皆でしゃべり合うことはあまりなく、具体的な話で日々精一杯だったので、皆で気持ちを紙に書いてボードに貼ったら、木になる位気持ちをシェアできたのが楽しく、新鮮だったです。

内山　いろんなもやもやや、いろんなことを感じながら活動していても、改めて文字にしたり話をする場ってなかったから、共感することがいろいろ出て、楽しい場になっていました。近いことを考えていた人がいた、という一つの安心感があったんですね。仲間がいた、という。自分だけこういうことを考えていたんじゃないんだ、という感じ。

鵜沼　同世代だけで集まって、考えていることを出す場がなかったから、同じようなことを考えてるということにある種の安心感を得られましたね。

内山　ワークショップでの課題出しというと健全な課題が中心で、皆、心の奥深くの気持はなかなか出せなくなっちゃう。8月の会には表面上のことじゃなくてもっと掘り下げなくちゃっていう空気がありました。

谷口　「いいことしようとしているようなうさんくささ」なんていう、普段は語れないような気持にも、皆が共感し合ってて、やっぱり会議では語れないことがいっぱいあるんだなあって。何かを決めるための会議ではなく、ここは小さな集まりだったから、本音に近いものが出せたと思います。帰り際に、「またやってください」って言われたのがとても印象的で、またやっていいんだと思いました。

内山　ごはんも食べずにずっとしゃべってたんだもんね（笑）。

全員　でも全然気にならなかった。

東川　たぶん年代が近いから、気軽に話せたんだと思います。年配の人がいると、自分なりの答えを持って活動してきた人が多く、こうだと言われたらそれ以上言えなくなってしまうから。

会田　それと、何かのテーマで話しましょうと言うとき、あらかじめこういう方向で、という本筋が決まっていて誘導されがちですが、それが一切なかった。本当に自由にそのままを出し合って整理することができた場だったから、熱中できたんだと思います。

谷口　私も真剣だったけど、皆もとっても真剣だったんだよね。こんなに真剣な若者がいるのに、この思いが萎えてしまったらいけないという想いを抱いた1回目だったんですが、楽しかったね。みんなが真剣に（課題に）ぶつかっていたからこそ、この円居の場の企画（1、2回）が生まれたんだよね。

（3月18日メヒカリ座談会より抜粋）

必要だけれど今までなかった「場」

円居の場いわき現地担当　内山智子

震災直後にいわき市に入って支援活動を行ってきた私は、2年目に入った頃から、被災者支援・仮設住宅支援はもちろん大切だが、同時にそれとは違う視点での活動の必要性を感じていた。それは今までのいわゆる「震災復興支援」というものとは違うものだ。なぜなら、この震災は、原発事故により、今まで誰も経験をしたことのない状況、課題を作り出したからだ。その漠然とした思いを抱えていた時、何気なく参加した会、それが「円居の場」企画準備の初会合だった。それは、ただ語り合うこと、支援活動をしながら抱えているモヤモヤを言葉にし、共有できる場だった。このような場は、支援活動でずっと動いてきた人たちはもちろん、ここに暮らす人たちにとって必要だけれど今までなかったものだと感じ、この「円居の場」をいわきで作っていくことに関わることにした。

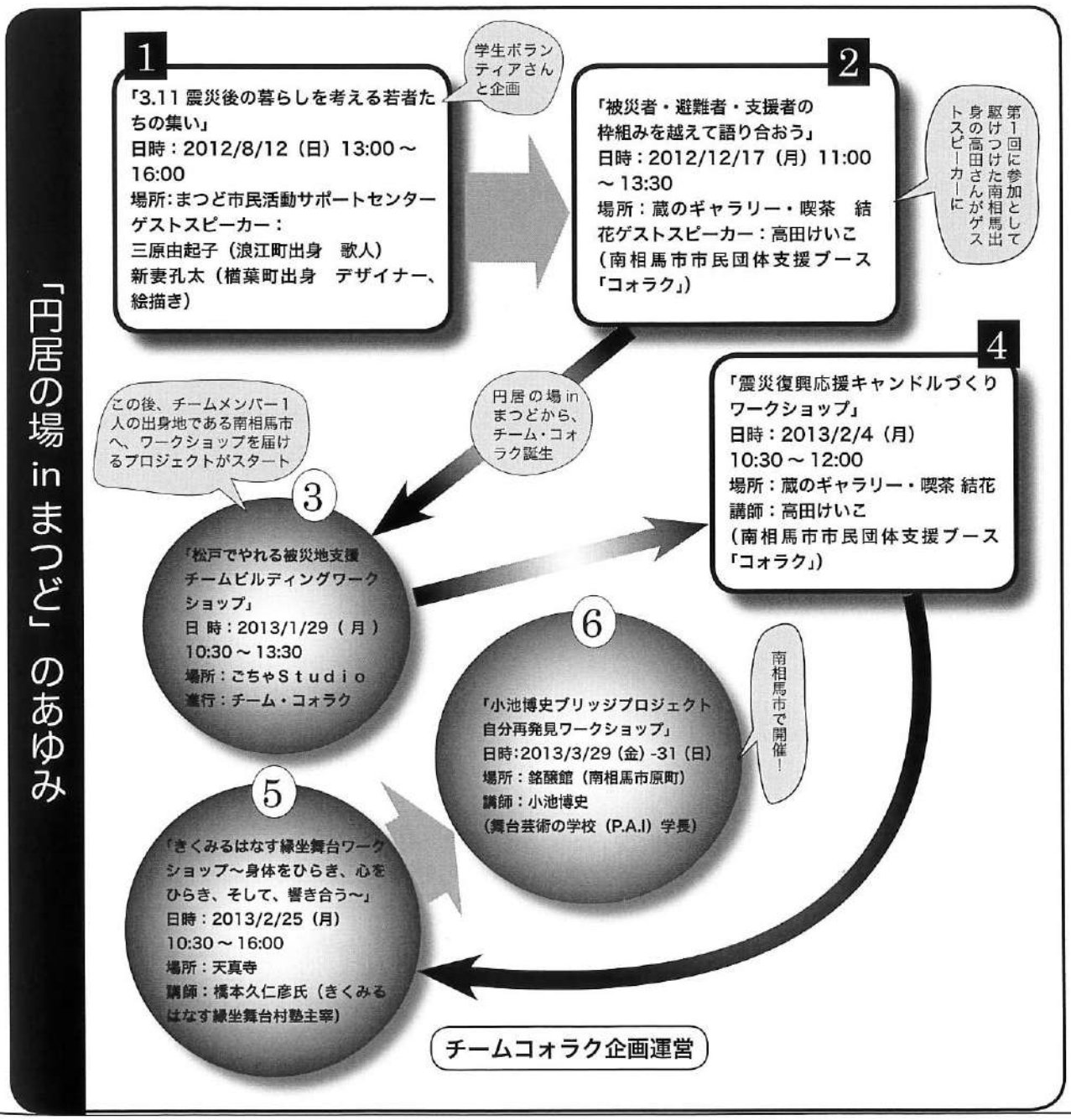
私たちは、突然起こった大災害に頭の整理もできないまま、混乱し、手探りで目の前の課題に向き合ってきた。震災から2年目に入ったこの時期だったからこそ、ほんの少し立ち止まって自分自身を見つめる「場」が必要だった。「円居の場」の企画とイベント開催のプロセスは、ここで何かの答えが見つかる、というものではなく、参加者一人一人がそれぞれの活動や状況にあったヒントを受け取り、それがこの後それぞれの活動や暮らしの中での原動力の一部となっていると感じる。今後、この企画に共感した人々がつながり、新たな広がりが生まれる、そんな可能性を持った「場」が作れたのではないかと思う。

内山智子（うちやまともこ）
震災直後に、NGOのスタッフとしていわき市に入り救援活動に参加。2012年8月より、円居の場プロジェクトのいわき担当として企画に携わる。

参考資料 円居（まどい）の場 in まつど紹介

NPO法人CoCoTは、本部所在地である千葉県松戸市でも、「円居の場」を5回開催した。直接的な被災地ではないがホットスポットである松戸市での「円居の場」開催の目的は、被災地の生の声を伝えること、そして、その企画に多くの人が関わる仕組みの構築を通じて、風化を防ぎ、震災・原発事故に「向き合い、つながり、共に歩む」人の輪を広げていくことであった。

第1回には、ボランティア学生2人が企画から参加した。第3回と第5回は、「円居の場プロジェクト」から誕生したボランティアグループ「チーム・コォラク」が、企画と当日の運営を受け持った。そして現在、「チーム・コォラク」は、メンバーの1人の出身地である南相馬市での「第1回円居の場」の開催に向けて企画準備を進めており、これをきっかけにして、被災地出身でないチームメンバー4名は初めて被災地入りをすることになる。このように、NPO法人CoCoTのコーディネーターが主体となって、被災地ではない地域における復興支援の場づくりとして行ってきた「円居の場 in まつど」は今、多くの者を巻き込み、震災・原発事故が投げかけた課題に関心を持ち続けている人々が関われる機会を創りだし、自ら活動する者を生み出し、被災地とつながり向き合う者の裾野を広げている。



NPO 法人 CoCoT 復興支援活動　成果と展望

新たなコミュニティづくりに向かう仲間たちをつなげて

復興支援担当コーディネーター
円居の場プロジェクト担当　谷口起代

聴くことに徹して

NPO 法人 CoCoT の復興支援におけるミッションは、被災地の市民が自らコミュニティの再生のために活動する支援をすることだ。コーディネーターは、現場のニーズを見極めるため深部に入りこみながらも、あくまで黒子に徹する。物資の配布やお茶っこサロンの定期開催といった活動と比べ、わかりづらい支援活動である。震災以降、宮城県の被災地で救援活動に携わっていた私が、CoCoT の復興支援担当として震災から１年経ったいわき市で活動を始めるにあたり、「円居の場」の開催を念頭におきながらまず取り組んだことは、あえて企画を形づくらず、聴くことに徹することだった。県外組織からの支援は図らずも「持ち込み型」になりがちである。それが、現地の負担になりかねないことを肝に銘じ、「これは必要なはず」といった先入観を取り除き、聴こえてくる声をそのまま聴き、そこから生じてくる動きに沿って場を展開し企画を練り上げ、出会った者と共に創り込むといった作業を続けた。

神戸からいわきに届いた「希望の灯り」モニュメント（いわき市平中央公園）

そのため、第１回円居の場の開催は当初の予定からはるかに遅れたが、このように、届いてくる声を頼りに数か月かけて練り上げ、企画チームと現地スタッフと共に丁寧に創り上げた「円居の場」は、２回とも共通して、被災地の復興において真に必要なものとは何かを問い、これまでの社会の在り方を根底から見直す内容となった。それは、日本の地域社会にかつて存在していただろう人と人が結び合って暮らす世界の中にある地域力や包容力、豊かさや安心感を思い出させるものであった。

第１回の座談会ゲストの内山節氏は、現在バラバラになった個人が、山村共同体のように、今一度経済活動も含めた結び合いの世界を創り、小さな経済を回すことで、豊かで創造的に生きていける具体例を提示した。第２回の橋本久仁彦氏は、日本独特の表現や文化の中にみる、関係性の中で生きる日本人が持っている「聴く」力を体感する場を開き、その力がコミュニティ再生に持つ可能性を提示した。

このようなテーマが根底を流れる「円居の場」には、至極当然ではあるが、これまでの高度経済成長期に確立した社会のあり方に疑問を持ち、今回、地域の復興

新しいコミュニティを創る

すなわち新しい地域社会を創りだすには、これまでのやり方は通用しないという認識を持ち、被災地に雪崩のように集まる情報を嗅覚でより分け、新たな学びを求めて動き、そして既に、自ら何らかの活動を始めている者が集結することとなった。

東京での仕事を辞めて帰郷しＮＰＯ職員となった者や地元商店を継ぐことにした息子、震災後に東京から移り住みＮＰＯの職についた人、震災後メディアでは流れないふくしまの日々の生活の声を発信する活動を始めた人、帰郷し個人事業主として生計をたてながら地域活性イベントを開催している人、福祉医療の専門家……。

NPO 法人 CoCoT の本拠地でも、「円居の場 in まつど」の開催を通じて、震災・原発事故で明るみに出た社会問題に向き合い、被災地とつながるために動きだす者たちが生まれている。原発近隣地域から一家で自主避難し、新たに暮らし始めた千葉北西部で被災地支援活動を始めていた者と、興味本位ではなく真剣に震災と向き合いたいからこそ今ようやく動きだした主婦層が、今、共に活動を開始し、被災者と共にワークショップという場を共有するという、これまでとは一風変わったやり方で、広く一般の人達の間に震災・原発事故の課題に触れ、暮らしのあり方を考える機会を提供するに至っている（p.12 参考資料）。

2012 年度、NPO 法人 CoCoT が復興支援活動において、聴くに徹し、聴こえてくる声と生じる動きに沿ってつくりあげた「円居の場」という舞台には、これまでのあり方ではだめなのだと自ら模索していた者たちが乗り、個々に点在していた彼らの間に横軸――互いに知り合い共に活動していく関係性――が創られつつある。つまり、被災地であるいわき市と直接的な被災地ではない千葉県松戸市において、新しいコミュニティを共に創る仲間が、戦後の高度経済成長を経て定着した、これまでの幸せや豊かさの定義を塗り替え新たに創造していく人々の生きた関係性の構築が、生まれている。

このように各地で誕生している、新しく小さな、コミュニティ創造にむかう「活動者コミュニティ」を、いかに支援していくのか。これが、震災から３年目に NPO 法人 CoCoT が復興支援活動で取り組む課題である。長く存続し活力のある地域社会は、常に外部コミュニティとの有機的な関係を持っている。CoCoT は、被災地の県外 NPO であることの利点をいかし、松戸市をはじめとする千葉北西部の「活動者コミュニティ」と、いわき市の今、まさに新たに生まれつつある「活動者コミュニティ」との交流を促し、生活・経済レベルでも有機的に連携できる関係を構築していくこと、そしてそのために、各々の「活動者コミュニティ」に連なる者が、地域の多様な主体と連携し、地域社会を巻き込みながら真に地域を動かすコーディネート機能を持つための学びの場を提供していくこと、つまり、県外の中間支援組織として本領を発揮し、コミュニティコーディネートに取り組むときがきたのだと認識している。

いわき市のオーガニックコットン栽培地を視察するコミュニティプランニングコーディネーター育成講座の講座生（2012 年度千葉県事業、ＣｏＣｏＴ企画運営）

円居の場　参加者の感想

円居の場 in いわき

<第１回　座談会>
大震災後に大量に増えた活動者同志のコミュニティがあってもよいのだと思った。(30代女性　いわき市)
ボランティアであっても起業家的な思考を持つ必要性を感じた→学びが必要。発想を柔らかくしていくのが大事だと思った。(30代女性 いわき市)
いわきの中で様々な活動が生まれていることを知った。そのような人が集まってくる（＝仲間ができる）場は貴重だと思った。(20代男性 いわき市)

<第２回　ワークショップ>
即興で言葉を使わないで、相手の接している身体からの相手の考えをくみ取り、身体で答える演習は実に斬新で、目から鱗でした。効果も抜群であり、それを見ている側は、何とも言えない感動を受けました。(40代男性 いわき市)
「言葉は歌詞」というフレーズに今まであいまいだった言葉に対する感情がはっきりと見えた気がしました。普段何気なく発している言葉でも、話す人にとっては大事な歌詞、寄り添って歌うだけでも相手に近づけることを知ることができました（20代女性 いわき市）
言葉を使わない表現で、こんなにも「その人らしさ」が溢れて、「伝わる」ことに驚きました。とても優しい時間でした。(40代女性 東京)

参考資料

共に聴き、ただ共鳴する 復興支援で「響き合う」ワークショップ

きくみるはなす縁座舞台という、ワークショップ型の復興支援は、参加者にどう受け止められたのか

（CoCoT 主催 チーム・コォラク企画運営）

2013年2月25日円居の場 in まつど
「きくみるはなす縁坐舞台」

自主避難体験を持つ語り手が語り、それを聴いたヒトガタ（参加者）が身体に湧き起ってきた動きに沿って舞う。「聴く」ことによってのみ成り立つ即興舞台。解釈はいらず、ただ共鳴するだけ。

復興支援とワークショップ ～今、ここで開催する理由～

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、未曾有の災害として甚大な被害をもたらし、多くの人びとの生活に、直接的にも間接的にも影響を与えてきました。～中略～　私たちは、私たちの生活が誰かの犠牲の上に成り立っていることを知りました。～中略～　3.11の大震災がもたらし表面化した問題から目を背けたまま、これからの未来を語ることはできません。震災から2年が経とうとしている今、月日の経過とともに置き去りになりがちな問題や想いに丁寧に向き合いながら、あたらめて、一人ひとりがこれからの生き方を考え、これからの社会の在り方に向き合うことを大切にしていかなければならないのではないでしょうか。
自分が自分の内なる声を聴き、自分に寄り添い、そして、人の声を聴き合い、人とともに寄り添い合うこと。 チーム・コォラクは、何よりも大切であると考え、このワークショップを企画しました。（チーム・コォラクホームページより）

参加者の感想

一緒に何かを出来る場を知ることができて嬉しく思います。復興活動に直接的に参加する方法だけでなく、WSを通して学びたいことを通して復興活動にも関われるのは「何かをしてあげている、いない」みたいな一方通行なやりとりではなくて、いいなぁと思いました。　(30代女性　松戸市)
私は死別体験が重なり、深い傷を負って今に至りますが、「言葉で気持ちを伝えられない苦しさ」がありました。「縁坐で舞う」ことは、体で気持ちを表現できるので、とても良い方法だと思いました。復興活動の助けになると思います。　(40代女性　市川市)
参加型ワークショップで自分で感じることはとても良いと思います。復興支援活動にとても適していると思います。理屈でなく心で感じることこそ大切です。(50代女性 流山市)
すごい！ の一言でした。この縁座はまったくの素人が練習もなくぶっつけ本番ですんなりとシンクロする脅威。さらに驚嘆すべきは、その芸術性と品位の高さ。かつてこの国の数多の村々で、地域の行事として伝承され、庶民が興じてきた、その土地の祈りにも似た舞台と流れを一にするものである……現代の閉塞感、居場所に対する違和感を和らげ、乗り越えていくための一つの大きな可能性を秘めているものだと感じました。
(50代男性　柏市)

Face bookより　きくみるはなす縁座舞台

<土、積み重なる層、つながり>
というテーマだった

罪重なる層によって
生きる為の場所や
育んで来た土地や植物や動物
そして人との繋がりを失ってしまうこと

深く考えさせられた
誰が悪い、何が悪いでは終われない

日本人はかつては死ねば土に還れた
土葬という最期の場を失ってしまって
生きて最期にありがとうを言って
還れる場所を失ってしまった

西洋の人は死を支配したいと思っている
その言葉はとても印象的だった
私の中では小さな頃から死は支配できるとか、
出来ないなんて所ではなく
お迎えがきて初めて行ける
最期のところと思っていたから

土（土地）に帰れない（還れない）
生まれ育った土地（土）の上で生き（息）られない
その悲しみがどれだけのものなのか？
そこにどれだけ心寄り添うことが出来るのか？

罪重ねた層
積重なる層としての生、つながり、場
縁座の舞台では
最期に寄り添いあう（在る）姿に
希望を見れた

金屏風の輝きが
一層に命、生の輝きを引き立てる
見事な演出だったなぁと

あらためて今感動しています
素晴らしい場をありがとうございました！！
（３０代女性　東京）

三菱商事復興支援財団・助成事業

3.11 後のコミュニティづくりに向けてつながる

NPO 法人 CoCoT 円居の場を通したコーディネーションの記録

平成 25 年 4 月発行

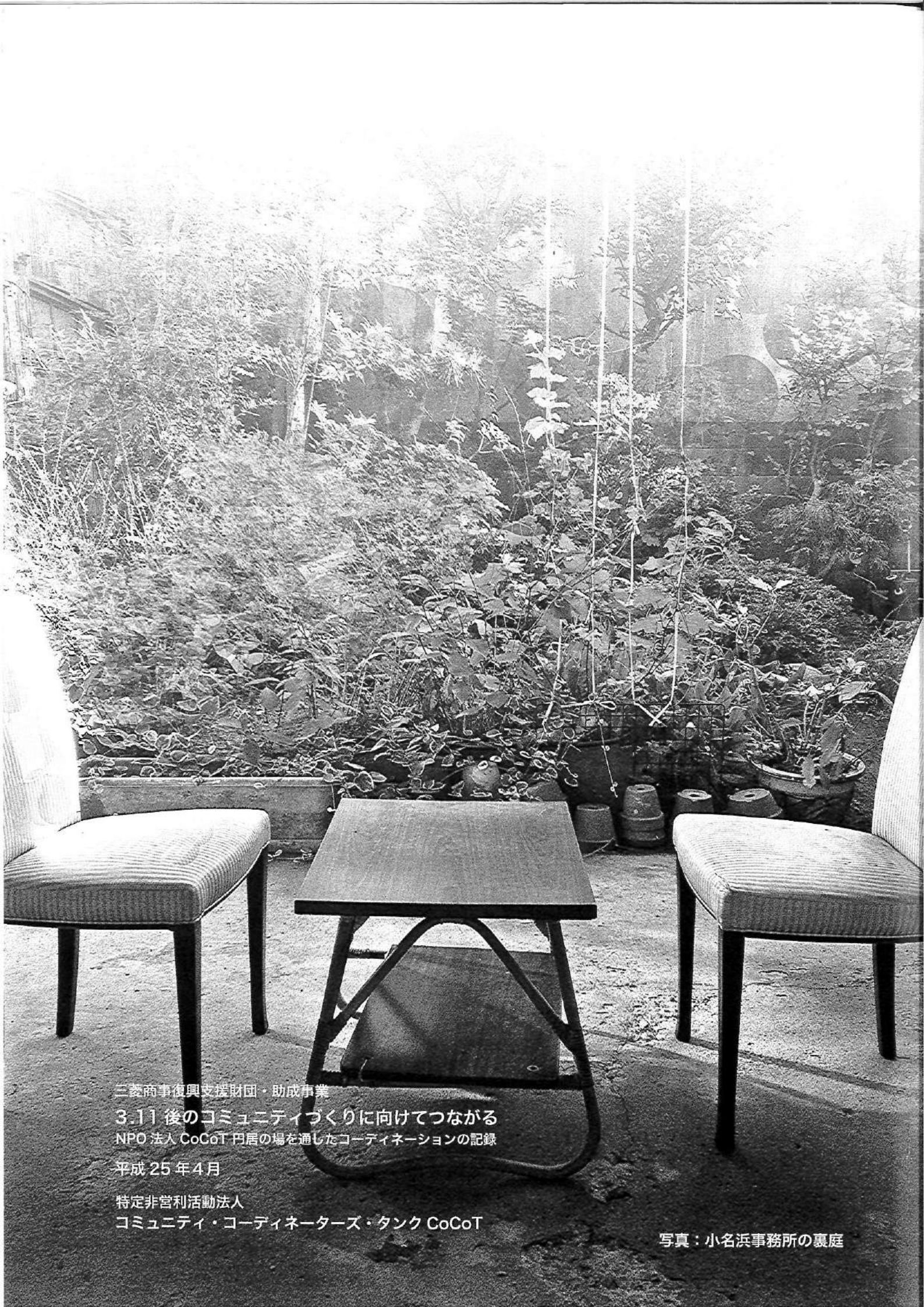
発行・編集　NPO 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク　CoCoT

発行責任者　川瀬裕思

連絡先　〒271-0092　千葉県松戸市松戸 2050
TEL：047-366-8909　FAX：047-369-7445
E-mail：contact@npo-cocot.com
URL：http://npo-cocot.com/

編集責任者　谷口起代

印刷　東京創作出版



三菱商事復興支援財団・助成事業

3.11 後のコミュニティづくりに向けてつながる

NPO 法人 CoCoT 円居の場を通したコーディネーションの記録

平成 25 年4月

特定非営利活動法人
コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoT

写真：小名浜事務所の裏庭